

スクに来て最初から最後まで三〇一収容所で約三年おりました。コムソモリスクでの作業はレンガ造りの三階建てと、その内装仕上げにあたる。ここで約七カ月過ごし、その後約一カ月くらい講習に行き、昭和二十四年八月二十一日興安丸にて舞鶴に入港、三日後、昭和二十四年八月二十四日無事故郷に帰りました。

シベリアの思い出

新潟県 小菅 稲秋

あれはシベリアに連れて行かれた翌年（昭和二十一年（一九四六）年）の三月初めの頃と思う。

我々の屋根のない宿舎に合掌が組まれ、宿舎の脇から掘り上げた土が、天井裏に敷き詰められた。

ステイリーカチゴリー（身体検査の三級者）の営内軽作業は「高橋小隊、今日は宿舎の木羽打ち

だ」と、朝の整列後に説明があった。

カンボーイ（銃を持ったソ連の兵隊）がいないから「ダバイ、ダバイ」と言われない「今日は助かった」と内心想った。機材庫へ金槌と釘を取りに行く者、穴のところに薪を集めて燃やす者など手分けして動き始めた。三十四、五人の小隊だったと思う。金網らしき物は五個ほどあったが釘がない。木羽もない。仕事ができないから皆で暖まっていた。小隊長が木羽板を持ってきたが、釘が無いので仕事ができない。マイナス三〇度ほどの寒さだ。午後三時を過ぎた頃、薄暗くなったが《黒皮ジャンパー》はロシアの収容所所長が来たのが判ったので急ぎ火を消した。「オンチェル！ポチカ・ニーラボート！（小隊長！なぜ、働かないのか！）」《黒皮ジャンパー》はカンカンになって小隊長を叱っている。小隊長は釘が無いのと、寒いと言いつけているようだ。「ザクリ・チョネ！（営倉入りだ！）」《黒皮ジャンパー》は小隊長に営倉入りを命じた。

五時の作業終了の鐘が鳴った。皆、屋根から降りようとする。「プロハ・ラポート（作業がなっていない！降りてはいけない）」と《黒皮ジャンパー》は叱る。

他の作業小隊は疲れた体で、晩の点呼のため広場に整列している。点呼をとつても人数が合わない。衛兵が何回も数えるが合わないので解散もできない。我々が屋根に居るから合うはずがない。

「馬鹿野郎ー」と他の小隊から罵声がある。《黒皮ジャンパー》は壇上で「プロハラポート（罰だ）」というような演説をしている。屋根の上は地上で整列している者より一層寒い。もうどうでもいいと我慢できなくなつて、皆が自然に梯子の方へ移動した。力尽きた。今にも落ちるかと思われた頃に、ようやく女医の口添えで我々は解放された。

翌日、また木羽打ちの命令だ。小隊長は営倉に入れられていたのだろうか。我々に「ダモイまで我慢しろ。ソ連側は『釘が無いことは知っている。自分たちの宿舎だ。どうしたら木羽が打てる

か努力だ』」とソ連側が叱っていたと小隊長は説明してくれた。

我々は皆で相談して、午前中道路に落ちているワイヤーや針金を捜し集め、機材庫で切断と焼戻しをして、午後から屋根に上り釘打ちをした。木羽が凍っていて釘が曲がり、なかなかうまく止まらない。木羽十枚で満足に止まっているのは、一枚くらいだったろう。だが、下から見ればでき栄えは「ハラショー」。

晩の点呼で《黒皮ジャンパー》がまたガリバー（説教した）。

「デキタデハナイカ、ハラショー」

明日は……？？また……？？？